平成二十七年五月
和光山　浄徳寺
一心　第四十五号

（平成二十六年八月　本堂内陣お荘厳）

（平成二十六年十二月　新納骨堂完成）

報恩講（ほうおんこう）に寄せて

住職　吉田　康徳

昨年十二月に新納骨堂が完成し、その後本堂の改修を行い、宮殿・須弥壇も新調され、内陣の面目も一新して報恩講を迎えることができました。

これもひとえに皆様のご懇念の賜と深く感謝申し上げます。

施設の充実とともに、一人でも多くの方がお寺に足をお運びいただくことを願っています。

さて、当寺の報恩講は例年十一月の開催で雪の日もありましたが、今年から暖かい五月二十二日・二十三日に厳修致します。

多くの方のご参集をお待ちしています。

浄土真宗の宗祖親鸞聖人は、一二六二年十二月二十八日に九十歳のご生涯を終えられました。

親鸞聖人をはじめ、念仏の教えに生きられた先達に思いをいたし、その恩徳に感謝し報いるためのお勤めが報恩講です。

お念仏の教えを聴聞し、自らの生活を振り返る、一年で最も大切な仏事です。

昨年暮れに精神科医の名越康文氏が書かれた『どうせ死ぬのになぜ生きるのか』という本が出版されました。

その本を読まれた方の感想がブログに掲載され、「納得のいく答えはありませんでした」「疑問は解決されませんでした」と、長年その問いを抱えていた方の落胆の声が寄せられていました。

私達は限りあるいのちを賜ってこの世に人間としての生を受けました。だからこそ、自身の存在の意義を問わずにはおれないのでしょう。「どうせ死ぬのになぜ生きるのか」という問いは、答えを見い出すことではなく、その問いを持ち続けることが大切なのだと思います。

ある方が、特発性間質性肺炎と診断され六十二歳で亡くなられるまでの一年間に書かれた何十篇かの詩が、『残された時間』という詩集にまとめられています。

病状の進行による苦しさの中で、「これまで生きてきたことの意味を自分に問うとき、私はどんな時も、いつも独りではありませんでした。私は誰かとの出逢いの中でわたしでした。」と、仰っています。

祖父江　文宏さんの詩です

「私」

わたしはどこにいる
わたしはあなたと
わたしはきみと
わたしはちいさいひとと
ちきゅうのいきものと
しにいくわたしは
いきものの
ひかりをうけて
ひかりとなって
なむあみだぶつとなって
ほとけさまと
いったいと　なる

「願い」

わたしは死ぬ
そして愛となろう
愛する人よ
私は死して
ひかりとなろう
あなたを輝かす
ひかりとなろう
あなたが
あなたを大切にし
あなたを誇りとし
あなたを信頼し
あなたを愛すように
ひたすらに願い
わたしは逝く
あなたを愛しつづける

これらの詩に通ずるものは、「愛の発見」と「いのちの出逢い」なのでしょう。

自身の存在の意義を問い続ける中で、すべてのいのちにかけられ、はたいている願いに目覚め、その願いに帰って往くのだと思います。

そして、苦しみと悲しみの中に生きざるを得ないわたしたち一人ひとりに、光となって還ってこられるのでしょう。

ごあいさつ

若院（じゃくいん）　吉田　隆徳（たかのり）

今年の三月に京都大谷大学を卒業し、四月から住職や法務員の松倉さん佐々木さんに同行し若院として法務全般を学ばせていただいています。

少しづつ一人でもお参りをさせていただいていますが、皆さん温かく迎えてくださり本当に有難いことだと思っています。

まだまだ至らないところが多いと思いますが、これからよろしくお願い致します。

さて、いよいよ学生生活も終わり、私は人生の新たなスタート地点に立っています。

そこでこれからの生活について自分の中で確かめる意味も含めて一言述べさせていただきたいと思います。

卒業式の日にある先生が、それぞれの道を歩み出す私たち卒業生にこのような言葉を贈って下さいました。

「答えを握るのではなく、いよいよそれが破られていく。四年間で身につけたその学びの形を大事にしていってください」。

この言葉の意味がいざ実際に現場に出て法務の仕事をし始めた私の中でよくわからずに引っかかっていました。

そんなとき、先日、西地域教化研修会で講師の伊藤篤師（帯広大谷大学学園理事長）から同じような言葉を聞くことが出来ました。

それは、「聞法とは答えを持って生きている自分を問い返すこと」「答えを与えるのは眠らせる宗教、問いを与えるのは目覚めの宗教」というようなものでした。

これらの言葉が意味するのは、私たちの歩みには終わりがないということなのだと思います。

知識を積み重ねて答えを握っていくのではなく、「自己とは何ぞや」という問いに生きることこそが聞法なのだと教えていただきました。

もちろん私には儀式の作法や身に付けなければならない知識・所作もたくさんありますが、学びの姿勢として大事にしていきたいと思います。

これからも、ご門徒の皆さまから多くのことを学んで行く努力をしてきたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

報恩講そして納骨堂落慶

代表役員　藤田　一誠

久しぶりの『一心』刊行にあたり喜びもひとしおでございます。

このわずかな期日の間に浄徳寺の建物は風貌変化いちじるしく、まったく別物の予感すら感じる美しく大きな器に出来上がったと思うのは私だけでしょうか、まことに喜ばしいかぎりです。

そして、また今年からは五月に宗祖親鸞聖人報恩講を勤めることとなり、昨年までの過去十数年間は十一月七、八日に勤めてまいりましたが、報恩講は必ずしも十一月だけとは限りません。

親鸞聖人が亡くなられたご命日が十一月二十八日でありますから、その月に勤めることにしたのだと記憶していますが、この時季の札幌は厳しいものでした。

報恩講とは真宗門徒の生活の中心でありその恩とは仏法に出遇い、そのことによって自分に出遇わせていただいたというご恩です。

自身を自ら凡夫といい、生きながらにして往生された親鸞聖人へのご恩といっても、そういうご恩でありましょう。

宗祖をお迎えしそれは私たちに「真実の言葉にであっていけ、言い当てられて生きつづけよ」の教えに対する報恩感謝といただいています。しかしもっともっと言葉では言い表わせない報恩なのでしょうね、

自分自身さえ失っているのが私ですから断定はいたしませんし出来ません。

それにまた五月二十二、二十三日には新しくなった浄徳寺の納骨堂、その他新築改装を記念しての落慶法要を実施し、その後祝賀会が催されますので、こぞって参加しようではありませんか。

今回は、新たに納骨堂をもとめられ法義相続される方々が多数いらっしゃると思いますので、お会いできますことをとても楽しみにしております。

なお、浄徳寺では掲示板に仏事聴聞日が掲示されていますが、年中行事その他、毎月十九日には布教師の先生をお迎えして定例法座が催されております。

すべからく私などは世相の風をよみ、周囲の空気を意識しながらチョロチョロとそれを善しとして生活しているわけですが、聴聞で真実の言葉に出会ったとき仏法にあうことができて良かったと深く感じる瞬間です。

納骨仏壇にお参りをして、本堂に足を運ぶというご縁をいまは亡き方からいただきました。

私たちは皆同じところに立っているのです、どうぞ聞法道場でお会いのせつは同朋として声をかけて下さい。皆で言いたいことは心を割ってワイワイ、ガヤガヤと楽しく話そうではありませんか、それが浄徳寺の聞法道場たれ…と、よろしくお願い致します。

前列左端を定席にしていますので、気軽にお声掛けをお待ちしています。

「宗祖親鸞聖人報恩講日程」

五月二十二日（金）

・午後二時～四時

大逮夜

法話二席

中野　誠二　師

（帯広市・大昭寺住職）

・午後四時半～六時

お斎（夕食）

・午後六時～七時半

初夜・物故者追弔法要

法話一席

中野　誠二　師

五月二十三日（土）

・午前九時三十分

晨　朝

・午前十時～十一時半

記念講演

法話二席

中野　誠二　師

（終了後昼食券お渡し）

・正午十二時

昼食（手打そば・要昼食券）

・午後一時～

結願日中・落成法要

・午後二時三十分

納骨堂落成祝賀会

（一階　会費一人三千円）

編集後記

たんぽぽ

吉田住職のご子息隆徳さんが若院（じゃくいん）として法務に着かれました。ご門徒の皆さんの「若（わか）さん」頑張れの声が聞こえてきそうです・・。

先日、瀬戸内寂聴さんがＴＶで「青春は恋と革命」と言っていました。次の目標に向かって更に頑張れ「若さん」・・・

さて、今年の報恩講は本堂が少し広くなり例年以上の参詣を期待し、各持ち場の打ち合わせにも力がはいります。

一方、炊事場が一階に移動したことで、ご接待に多少の戸惑いがあるかも知れません。

そこのところはよろしくご配意を・・・

（事務局　芦崎）

「一心」事務局　連絡先（浄徳寺）
〒〇〇一－〇〇三三
札幌市北区北三十三西十一　二－一
電話　七三八―六六三六番